特別
13
3468
3

門へ13
號3468
卷3

昭和二七年
三月十八日
購求

再昔花川譚卷之三

馬琴戲編

夢之編ハ芝崎の寺入り主従

墨田川原ハ佐一兵衛を打ちやり。水草を奪ひとりて立去り。癖者ハ梅堀の小五郎兵衛なり。此小五郎兵衛。水草が容貌の優れるまこと。俄頃ハ慈仏尼が非道の行ひを知りて。家を使ひ入り。威しつ賺しつ。さ成ぐいひこらへく。次の日元吉原にゆる傾城町ハつ見ゆきく。おの見ゆ妹なりと。いつり。年季七年の身價六十両をうけとり。その金をもて淫酒の爲ゐつひ果せしとぞ。女院のあるじも。水草が孫さ

佐藤蔵

數年かのかをこんくふうく新び。秀ぐちまりこと自生育りのいおけ
づくこんあれゆのあ身くく。ま煉手管ふ怜悧まれどこれい十七きの
きのふゆくく。か原世ちう世んとも必ひうけざる女子あ身ば系外の
調香花。茶の湯ハさくふかり。廓の諸譯をものこと世その
のち突生くくといふとのふくく容ふも食ふまべられとて芝濱村
の道場ふ隣ふく。所持の別荘あ身ば。老女ゑくう。女の童ゑくう
を傳ふく。ゑざくくとのところふ養ひおく紙ふ光陰をゆくあ
ふりも委あくく。ちやくくもこ五月をぞ孫くうちる。こふ芝濱
の道場ふハ冠者次郎義廉ぬく。挾限富次郎ととも。ふび

しうき世をきのびのふよ。折くも七月七日の夜あれば端ち
くくちも出ふく。牽牛織女の故事あど語り出。秋のきの風
まちぐほよ。萱ど軒揚ふ花うふ蛍も。二星の天陣ふくく奇よ
れ。更ゆくはこいも寝くく身まで。只顧慕くおくくくる。忽北隣
堺の生垣を切破くく。こあくく人きのび出るものありこくすくく
盗人あくん。追遣ひくく怒るさざやくくて。こ後まごろの棒を
携。木蔭ふ窺ひのふくもあくず。癖者ふ牆を潜りて。輙
く眼ふ出ることろを待受る義廉ふ従ふ足搦ひて打仆
せバ。癖者撞ふ顛びつ。反起ハを起さじく。富次郎蒐くこ。

う一廉
笠ぬぎ
用居のと
宮ふく
ともま戦と
追ちら

右の腕を禁じて掃る。その〳〵やくこうり拂ふ。袖は断ちてよ
り残る。爾はあやあー癖者は。涙をもつんぢーて逃げいぐ。ぢ
ちぢめと追慕ふを。義廉ぢぢーと呼ぶあひやを富伝。
逃るをめをば遠くあふ追ひそ。涙ふ。紅りの癖者あり。寛ふ
声を志ぐあく。富次郎揺りうれば。盆燒の薫えあはして。
妙なる詹は正ー〳〵女子。こころえぢとりつまみ。ぢが住部
臥ふ支久り。さて火を照つぐーてうーつ見ば。年紀は十七
八とおぼーき未通女の聖ぢぐーき涙ら〳〵けーを拭
いふるのなり〳〵ぬやう〳〵は拾ひ志やうれば。女ぢく街

せまるる拭をとり〳〵せ〳〵。義廉つぐ〳〵えまふ。その顔久声音
ちぐ〳〵。往る世を去足妻。佐江の方ふ露とぐはげれいこふまき
魂のあとぐれ〳〵。志ぢーは見ぢるのなるうまる鳥ふ人あつく。
遠魂香や燒りんと。今さ〳〵ぢ〳〵手きもきつ。まづその人を宮
ま人ば。女子ぢ〳〵ーかをえ安房の國のその名
う。悲領の兄。を郎左衛門ふ人ふ計是。その仇を報ん為
涙ふる兄ふ侍れく。武藏のくへ椽〳〵もちるる路ふ〳〵舊の若
黨佐一吾清といふものよぐりなひ。その人ふ倡せられく。鎌倉
郡〳〵。墨田川系とといふ郊まぐ来る折〳〵。いとむく

つけきあく男。俄一疱をおこし。ちくふを棄きりておのれ
う妹なりといろり。そ吉事とやうんいふ色里ゑ賣ること」ぬ。さ是
いとの子ハ忘ひもうけ。河竹のおれゑ流く。袖ゑ濟の乾ねば。
あくどいやぐ客ゑ會せば。とのゐ寺のあるくなる。別荘ゑ養
おきく。おぞー也学びさをり」ゑ。彼あく男ゑ名ハ小五ゑ情
とやうんいふ悪ゑのふく。折く彼処ゑ志のび来ふ。くるくは
混くるといへども。ゑえく返事もせざりく。彼いうある仕儀あり
ちん。今宵ゑく志のび事。ちくふよゑ拭を銜セ。肩ゑ引
うみく走り出を。老女も女の童もうちくねりくとれを

走くふぐて憂ゑうゑ人なる恥をうけりやせんと浅ましくも入悲
しくも哀しゑよとうふぐ彼ひるくふられしといもあるりあり。と
物ぐるりつゑ愛を合を。あゑくこあくを仕拝めば。富ゑ郎ゑ見
く。安房國の人みく。ゑを郎ゑ蔑といふりのを。人ゑ討せくなる
うふハさてハ挾野ゑ郎ゑ熊ゑの妹水草どのよハあくぎやくゑば。
女も大よくも猛き。こハ何とてうく人を。ハくくも志りるひ。
いりみも水草なりくゑば。我屋も哀ひみぎとく。今さて竭ぬ
ゑ従の縁ホーを。あもくくるひる。財ゑ富ゑ郎ゑいふ。挾壮
氏ゑうゑ家ゑハこのとく素不和なる故ふ軒をなうぐく住あぐ。

仕方みて匠を會うるゆゑなれど。左衛門なる水草といふ季の妹ありしつゆくうきうきかくいふ基に挾隈富之進が家富江郎。これあるに誰の屋舍冠者次郎義康君ふく在さると世界の上を物ぐるれい。水草ハ遠ゑ世を去て。ちりいるとなりふ。扨べつて悲こつ。爰こゝ夢こゝるこちせり。富江郎ハ次郎左衛門。仇を寵ふこゝるくゝまさ人。家隷あぐゝ義理いる長吉彼を世くゝ討せゞ。ゝ兄ゝ弟ふ。生さて。冠者次郎ハあきゝ似ゝ。

きる水草を慊こゝ。これり昔の夢なりもゞ。清牛ゝくこの女ゑゝ苦界の勤ハさせゞきふ。愁ゝ世を厭てゝ。朽をゝき

ゝ情ある。言葉ゑゝ意のあゝゝれゝ。岩ひつゝる道世もゝれれ。そふゝる事失あれゞ。これ幸ゝ富江郎。ゝゝ厭ゑもさの日来。徒然もゝ伎しすせゞ。水草ゞのハゝゝふあゝゝ。ゝゝし慰め伎ゝゝせゑ。これらハ孤ゝ暴あゝゝ。俄頃ゝ改痛姫ゞゝゝ。此世を外さ頓仮病障子引ゝてちゝゝゝる。一室ゝ入ゝゝ休ゝる。秋ゝゝ入ゝど短夜の次第ゝふゑゝさり。星の契りをゝ竹もゝゞ名のゝゝゝ初恋の睦言外ゝふさゞ。鴛鴦の衾を鳥鵲の。さゝゝゝき夢を山さゞゞ折ゝゝ。梅堀れ小五ゝ乞情ハ位持同宿引つれゝ。ゝ燭さしつけ部屋の戸を。

梅堀のゆ五郎
長湯の長廣
水草が密通
えゝ
金は
せんと軽計

あらくふ引あれい。裡ゑ入ゑ〜義童水草。逃出んゑ蝸
の中。帯さへ引ける〜面目も。捺落の底へ入りしき風情。小五
郎兵衛ハ用捨あく。蝸の鈎ゑを切おと〜。二人の襟髪ゑ
掴を。膝下へ引ゑ。とこの拍音ゑ富ゑ郎も。一室を走り
出ゑ。ゑ岩ゑ密夫ゑ露顕せ〜。とこの爲体ゑ救ふべき方
便なくれば拳を掴り。歯を切り〜ゑ入ゑ。小五ゑ吉情ハ
いきゑ紀あく。只今もいふゑ。こゑ旦ゑ入てゑ妹援ゑき合ふ
まぢゑ。近曾廓へ出ゑ〜が。親方様を別荘ゑ養長ゑ紀て
お学ゑるをこの真男ゑ相語〜。くゑあげゑる時び合ゑ〜ゑ滅

てハ親方へ義理も缺れば男もくずと。骨〜つけ〜押〜出へ。
畢竟寺ハ揚屋同然ゑ。念仏ゑる坊ゑもなれ合ゑれこゑも海
寺法や立。と罵り〜ゑる伽倆の土圭曲ゑとゑの撞木ゑ。かゑふ
ゑる手ゑと入ゑ〜ゑる位持。ゑる手ゑる氣ゑ。ゑふく。この仁ハ故ゑ
く。寓寺ゑ寓居ゑ。ゑる。出家なくねば仏の教をゑゑ。ゑ
も。ゑ。されど淫奇ゑ。ゑて。ゑ場を汚せ〜ゑ入ゑ。ゑを
追放ゑべ〜。ゑ女ゑハ身ゑ妹と入ゑと既。廓へ賣ゑれば。ゑれゑ
其訝のゑ〜ゑも。ゑ。強き〜ゑこの女ゑを抱ゑる妓院の主人未
ハ。寓寺の檀那ゑ〜ゑゑれば。女ゑハゑ〜ゑ送ゑ〜ゑれば。ゑれば

刃義淚の鉄るるもあり。男のまるるもあり。といひもあくまふ
ふくさ傷。うくくと打笑ひ。口うとくもいるれど。石佛をくふくふ
よ。屋とんぐ出のくをうび起。ちまく押こ盗人をこのまるるもあり
べきらぜひこの男ハ貴ひ文紙のまふ計りんと。崖ふうくりを行持
うまめく。人のさぶうんあれども。うどの善悪ハうえぬやふ達くく此
仁を心のまくふせんとなるぶ甚詳をもみくべかし。九校ふけくくを
訪うハ門外まうもとあひくく門守をぼび起。案内さをて乞ぐきふ。
さハあくくて牆を潛り。塀を越くく寄うくくふ。ちうもあはさび
盗人同ふまんごとのまうり紀明ぜんや。といれくく流石のふ丸ふ傷。

それとさうロどりれハ富江郎まくくく出。嚴形右のび寄まるふ癖
者とり逃せどるまよ孤る。その片袖をさし出ふを住持それをうんも
やくぶ物くうれねハ盗人を放くく遣も出家の法。小丸ふ吾傷くういひ
ぶんあくくハまや明白ふ紀まふ及がまそいざくく極堀退之采あれく奇
ぶきくくぬ挨拶ふ住倆のくくをかくぐうり。理の南蛮ふ横紙も彼
アうねるる立くくれふくく。まくくぶ渠奴おハ此寺を忽地ふるるひ出し
ふ人ア。一日も留まうハ吃度出入を致まぶくく。その時後悔ふるふふと
わざきふわざいくくふ丸ふ傷ハ小門の潛りふうせくく。やて家踏ふ
かくうる。住持の上人ハ義廉ふ従ふうち對ひうふ氣くくいひふ

ぐ。道世の望より門入る羅き入る不義放蕩かるうくちちう
乃ちれ痛しくくいくども明あいづ方へも越あれ又女ぶるい。
親方を呼びよせ。引ちくまくべくと委細の命じうのへまそ。
役僧承て天明のころくを走せく。彼親方を招きこの世。水草
を遍ふーうれい冠者次郎主従も刃の悩ふ恥入く。素
くー寺をちち出のひいづくよ當ハなのれば。乙弟禁の神頃
をいいー世うーくー上久。湯殿のうくへ勢きく。藏きさ小松
原を過のふ待設る小五郎吾儒。まての悪りの十人あま
て。大路せまーと立ぶり。形状も似ぬ押着この沿後の

人徴ー棒くくへ。打くかるさ富次郎。主を後よ去向ひ。
按あらせても多人勢よ勢。閃く棒ハ肩腰のうちもあく
打居られ。主従息もくえぶふのくー撲地倒さり。小五
吾御卢をうけ。是奴殺ても罪つくり。こ赤ひけくと顕て下
知富次郎ら懐よまをさーつく断ら手。つぶに袖をうり復
う。立くくんくまる折ーも。そひもうけぞ松蔭うり。小五郎儒
且行と。呼ぶめくー立生ふ。隠家の茂吾儒あり。れてく整く
小五ふ儒。手下の後も意味うく。一こころへりこそれで。富
次郎起くう。ふめづじや長吉。れくが羅義の筋を。右のく

義経湯
志ゝ人
冠者主従を

こゝへハ来りしが。忍びゐけざると欲へバ。蔵主清ハ右にて左手を着。多く
の御恩を仇になして。故御浅草へ逃ゆく。ただしら紀世を去のぞ事の
名も隠家の蔵主清と更めてかすく本日ハ送年しが。主君の恵
ハ片時も忘れず。さるに此経てゐ厳にあやんで高祀出方の仏像首
く芝清の居場に御坐あるを子ふるこのりのが受出し。今朝ま
明て走り来りし。小五郎兵衛が較計すると。委細きゝつるにかしく
あらば路をいそぎて余りしに。今一足遅くして彼ぞが打擲
にあらたまふせしこそ悔しけれ。さりとて蔵主清がくるまるる
を何事も打まかせられよ。かく見物さするべし。といひ慰めて

小五郎兵衛がほとり近くあゆミより草衣の袖を肩ぬぐでき
揚げ。長き眼指の刀を鋪綻にさし。身をひそと立すがひ彼処
なる二方ハ。蔵主清が恩ある人なるに。何科あつて打擲せし。その訳
きゝんと問かけれバ。小五郎兵衛あざ笑ひ。科なきものを打べきや。其
奴ハ其妹と密会し。が面へ泥を塗る大盗人。以後の戒め情ハ笞
痛めハさらもちぞとそらふ嘯ば。蔵主清ハむく。不届盗人の言ふ名がちがふ。
汝日外旅の女子を拐掣し。妹と偽り廓へ売り。許多の身価
を貪りてども。まだ飽ぜして色に假托再び女子を盗出て去
き縣へ八重責の較計ちがふて意趣ぞかし。證据ハこれぞと

いつしかあくまで。小五郎を清が懐より。引出しまする以前の匕袖。それハ慌てくさ〳〵出まで。腰首掴〳〵抜つくなびく。ま下の悪棍騒きまち。打〳〵かはの人棒を。いようせ〳〵引まくり。中をまいりひ打ちまする。算木をし舌まる異あ〳〵。蔵を清ハか〳〵打伏せて詞りまする。廓の恋い賣物買物彼女子が客達〳〵。新枕まるその夜あ。この方まはのお仕〳〵て。蔵を清が金を進〳〵まる。妓人りのハ誰あれあれ。島の根留はを合点なるかあ〳〵まて出入をりて来よ。

「絶まる〳〵〳〵度言〳〵。白眼を見まびい小五郎を清。絲をのま下緒ま〳〵。踏ま〳〵だう腰立まで。こ〳〵ちまりて出しまえ。かて蔵を清

ハ我廉主従を伴ひくり。友二百ハ〳〵家よおきまりふせ〳〵。〳〵人出入藪〳〵して。世を去のびまる便あ〳〵れば。近き辺の借屋より移〳〵入まる。おのれハ日〳〵ふ行〳〵ひく。〳〵ま〳〵を賄ひまる〳〵せ〳〵ふ冠者次郎ハまる〳〵。富次郎も是管彼ま信ある志を感悦〳〵。主従ふちま〳〵を〳〵。十日あまりを過せ〳〵ふ水草ハ誰也〳〵改名〳〵。近日安を迎るとつの風ゆ百ハ。蔵を清その日より郷導〳〵。誰也を我廉よあらせ進せ〳〵ふ。小五郎を清〳〵徒も。向の島ま〳〵〳〵懲〳〵。これを阻んとまるとくふ。却世の胡盧ふ〳〵なりける。

第四編ハ義女八橋が事蹟

冠者次郎義廉ハ隠家の茂吾清が郷導ゆゑ。窃に
その日より。淮也が會馴まひしゝゆゑ淮也も義廉ハ古主なるゆ
ゑ。ともに孤さゝふ離びまへ。この殿なゝゝ他し寄ゆゑ。身をまうせど
ゝ切なる程ゆ。今ハ寄ゝゝ廓通の生平なり。茂吾清ハ所持の
猟形を沽却し。或ハ利足ゝゝの金を借受なゞゝゝ。其與
の雑費を涸まゆゝふ世ゝふ近曾淮也がゝゝ人黄金あるとり
てる田舎客のあゝゝ。只一度坐敷を勤ゝふ。身受せんして。
その日既ゝ怒ゝふ。ゆえれば。義廉ハいつもゝゝ茂吾ゆ

彼女子を他ゝ人ゆ遍ゆて。富次郎へ義渡ゝゝして。且ゝ五郎
兵衛ゝ彼ゆ笑ゆ。ゆえも朽をゝゝて。只管ゆ焦燥ゝも指あゝり
ゝ身價のゝくのべきゝゝゝ子ゝもなゝれば。妹八橋を廓へ奪ゝ
ゝやゝゝ。ゝゝゝ回ゝゝ。縦ゝ結の金なりゝも。只一人
の妹を賣ゝゝ。他人の遊興を助ゝゝ。縁由なゝふ世の人ハ。凡
弾ゝゝ性ゝゝ。ゝゝゝ命金なる堺をえゝて。その金を誰也
ゝゝ隠ゆゝゝし。ゝゝゝ身受のゝゝを阻ゝ。そのうちゝゝ別ゆ金の
調べきゝゆ陵もありなんと思案し。所持の猟船五艘ゝ残ゝ
ゝ世ゝゝの田地ありゝ。ゝゝゝふ泊りゝゝゝゝ。八橋を妻せべき。

聟をとらんと索ぬる。音戸村の南なる。舟川戸（今の総川戸）の三五右衛門と
いへるの媒して。男熊とて二の町なる在百文の布舗金なく。聟入
させしと望みのあるよしを告来る在ハ。茂右衛門大よろこびて
八橋にもいひ合せ速に熟談して。既に婚礼の夜にもなりければ。
三五右衛門ハ短襪を蹴る中々に寳なして。彼聟を伴ひ来り。是ハ
癩の鰐蔵とて。元ハ鎌倉に住ていと富足し商人の二男にて有しが。
容貌ハ葛城の神に似たれども。気立は清き佛にて世なる者言
に馬にハ乗てみよ人にハ添てみよといへるもあれバ。只玉椿の八
千代かけて。夫婦睦しく相語らんなど。信ぜしむ引合するにぞ茂右衛門

同胞燈燭をさし向けて。その人をよくよく見るに癩といへるもことわり
や。髪の毛ハ耳の脇と項のあたりに斑に残りて。鼻の穴さへなき明て。
眼汁黏しく流出て眉毛ハ一條もなくして。膚ハさながら猿滑と
いふ樹のごとく。又覇王樹に祉祁忌せしるに異ならねバ。八橋ハ呆
て呆れて。二目とも見られもやらず。かほどの者とハ思ひもかけざりし。茂右衛門も
妹が仗なさけなき世の中の嘘えき心ならしめつつ。言葉も一回答もせざりしが。まま
く謂ふ今宵の布舗金替癩なりとも餓鬼にもあれ一旦結びし婚
縁を破らんハ男子にあらずと志を励しつつ。立て盃をとり
生まで折しもあれ外面より。ちりりくとうち―礫ハ男の髻に

八橋鰐義
婚姻の夜
行ゆくとも
ちぢ
あまくの
髻を
なげこむ

よれ名〻。七人の妻を記〻れば。歳若き方を怒り罵り。れう〻を
情〻〻り。今宵の婚姻を妨〻〻。つる送恨を復さん爲小五郎
が徒の奸計よ究まり。そ引捉〻〻被せ〻れる。めれ衣を乾させんと
ひろけ〻〻立ながらを。小五左衛門しを〻〻貴ことさへおぼせ。
女子のつれ生ハ対よ笑り〻〻男あり〻〻恨の髻切ちよ赤紀名
を示せ〻〻の狡。おれば〻れ〻〻婚どのを頂り帰ア。いよ〻〻妹婿
不化名おきよ方〻〻ハ。又別よ日を云〻〻盃さ〻すも遅り〻〻〻〻
いつせもあくを声より立。かく〻〻結び〻〻婚縁を羽立へも延き歳を儒
なりとぞ。り〻〻小橋よ密男あり〻ハ。首を並べる天下の捉婚の名

花川巻之三終